

# 備陽史探訪

第90号  
発行  
備陽史探訪の会  
福山市多治米町5-19-8  
TEL. (0849) 53-6157

## 暑い夏には

平田 恵彦

「家業の関係で真夏になるとほとんど仕事がない。らくちんである。たいへん恵まれているようだが、仕事がないということは、収入がないということだから本当は「えらいこっちゃ」なのである。夏休みでも給料のもらえない学校の先生とは違うのだ。でも、それさえなければ仕事をしなくてもいいのはいいもんだ。

で、いま何をしているのかというと、ひとつは九月の郷土史講座の準備。これがけっこう大変で、話すのは二時間足らずだけれど、下調べは二ヶ月は十分にかかってしまう。いまから取りかからないと九月の最終土曜日に間に合わない。

辰巳和弘著「高殿の古代学」、岡田精司著「神社の古代史」、池邊彌著「古代神社史論攷」、山内泰明著「神社建築」あるいは大場磐雄編著「神道考古学講座」原始神道期一、二あたりを読み返している最中だ。

二つ目は個人的な旅行計画の立案。これはそうとう楽しい。誰でもそうだろうけれど、旅の前に訪れる場所をあれこれ想像するのは夢がふくらんでいいものだ。計画を立てて史跡探訪をする場合はほくは凝るほうで、とくに関連書はけっこう買い込む。

この旅では古市古墳群（藤井寺市・羽曳野市）を中心に一泊二日で古墳めぐりをするつもりだ。それで「羽曳野市史」や藤井寺市が発行している史跡ガイドブックシリーズ（これはとても充実している）を十冊ほど購入した。ほかにも関連本を買ったので二万円強の出費になった。

この古墳群にはいわゆる天皇陵古墳が多い。たとえば岡ミサンザイ古墳（仲京陵）、島泉丸山古墳（雄略陵）、菅田御廟山古墳（心神陵）、市野山古墳（允恭陵）、白髪山古墳（清寧陵）、ボケ山古墳（仁賢陵）、高屋城山古墳（安閑陵）などがそうで、これらの古墳は外からしか見学できないが、やはりじっくり見たいと思っている。

古市古墳群を訪ねるのは実は初めてではなく六、七回は行っている。でも、今まではここがメインではなかったの探訪したといっても漏れがある。周辺には陵墓以外にも面白い古墳が多くあるので今回は存分に味わおうというわけ。また、藤井寺市の津城山古墳の新しくできたガイダンス棟「まほらしろやま」やデザインがユニークな生涯学習センター「アイセル シュラ ホール」の歴史展示室、羽曳野市の「陵南の森歴史資料室」なども楽しみだ。ともかく親しい仲間との旅なので充実した計画にしたいと思っている。

三つ目は、日ごろ感じている歴史に関する疑問を発作的にあれこれ調べている。もちろんこれは調べても解答が出ないほうが普通で、ほとんどは、ますます分からん、ということになる。でもいろいろな本を読むうちに新しい発見があったりしてそれなりに楽しいものだ。

たとえば、いま首を突っ込んでいるのが鳥取の装飾古墳（壁画古墳）の謎だ。ふつう装飾古墳というと九州の彩色壁画を思い浮かべるが、線刻画の場合もかなりある。実は鳥取県は線刻壁画古墳が日本で一番多いのである。

森浩一先生が「古墳に壁画を描く

さまざまな理由の一つは、墓を守ろうとする願望であろう（古代日本と古墳文化）といわれるのは、それはそのとおりとと思うのだが、壁画の真の意味については分からないことの方がはるかに多い。

この地域では壁画のモチーフに魚を取り上げたものが多い。有名な梶山古墳（八角形墳）や鷲山古墳、空山古墳などがそうなのだが、辟邪の意味ならどうして魚を題材にするのがよく分からない。また、描かれた魚の種類が何かもはっきりしない。九州の彩色壁画やそのモチーフについては比較的研究が進んでいて書かれたものも多いが、鳥取の線刻画や魚の図案について研究したものは、ほとんどの無知のせいもあるだろうが、ほとんどないように思う。斎藤忠先生の「古墳文化と壁画」の「装飾図文集成図」でも他の図案と比較して申しわけ程度に取り上げられているだけである。そういうわけで素人考えて謎を解いてやろうと思っただけだが、目下大苦戦である。

暑い夏、みなさんはどうお過ごしですか？エアコンの効いた部屋でんびりするのが体には一番いいのかもしれないけれど、ただそれだけじゃいやねえ、アタマに汗をかくのもたまにはいいものですよ。

## パリの屋根の下

## 石井しおり

晩春の陽光を浴びて緑したたるマロニエの並木、その白い花房を見上げながら四月二十日の夕べ、四度目のパリの土を踏む。息子夫婦が私の前後をガードして行動するという、老親を庇護同伴の旅の始まりである。

メトロ（地下鉄）を降り立ったとき、香しいハーブの音が響いてくる。見れば、彫りの深いマスクの青年が弦を弾き、その前に小さな籠が置いてある。長旅の疲れも忘れ、耳を傾けながら小銭を入れると、彼は私と目を合わせニコツとほほ笑んだ。こんな光景に出会って、そうだ、はるばるヨーロッパに來たんだ、という思いがじわりと深くなる。

やっと凱旋門の側にある常宿のトロワイヨンに到着、荷物を部屋に入れる。いま時刻は夕方の七時で、夕暮れとはいわれぬ明るさ、早速、五、六軒先のスナック「ケンブリッジ」に入る。

扉を明けると、ロックミュージックが我々を迎えてくれる。仕事帰りであろうか男女が屯していた。パーのカウンターでリズムを取る若者、誰かを待つ亜麻色の長い髪に黒いド

レスをキリリと纏うパリジェンヌ。ほどなく注文通りに近づいたギャルソンは、ナポレオンによく似た若者である。テキパキと客の対応をするさまが心地よい。さすが「芸術の都」に住む彼、ちよつとウインクしたいような趣あり。

というのもそんな雰囲気を感じ出す何かが、このパリにはあるのだ。名付けた豊穡の文化ともいふべきか。私どもが無事に到着したのを祝し、息子がビールで乾杯の音頭。機内食でまだお腹がいつぱい、軽くキッシユ・サラダ・オムレツを注文する。やがて店内は混み始め、ほろ酔いの体に名残惜しくも席を立つ。

石造りの館トロワイヨンの第一夜は爽やかに明ける。三年前に宿泊したときと外観はそのままだが、内部は全部模様替えしてあり、以前より単色淡彩になっていた。螺旋階段はケヤキの木肌もやさしい感触となり、靴の踵のかかる部分と、手摺は金で張られリッチセンス。

ホテルで朝食の後あと、すぐ近くの朝市へ行く。未明に北海道から来るのであるうか、さまざまな海鮮食材が生きのいい色で台上に並び、日本同様の威勢のよさで男たちが客を呼び込む。

野菜も新鮮そのもの、聞けばフラ

ンスは農業立国である由。郊外の農家は広い農場と牧場を持つという。

私は、野いちご・牛乳・浄水を買ひ、名も知らぬ果物の前で店のお兄さんにカメラを向け「ウイ」というと、ニコツとポーズ、はいパチリ。かの有名なシャンゼリゼを歩く。

フランス国旗をともう一種、私の知らない旗が同格に道の両側に掲げられ、要所にはポリスカー、男女のポリスも立つ。きつと外国要人が来訪されるのであろう。

若緑のポプラ並木や、いまを盛りマロニエの高い茂みの中に翻翻とはためく国旗。その浅みどりの空に凱旋門はくつくりと聳え、この国の象徴として光を放って立つ。我々の忘れかけているものがここには厳然として存在しているのだ。

グランパレ美術館の前を通り、道を隔てた右側の小公園に向かう。淡い紫色を主体にしたヒヤシンス・かすみ草などの花々がブーケのような形で所々に植えられている。瀟洒。アカシヤ・松・八重桜も見受けられ、その馥郁の香と見る者へその品格をさえ示す。

逍遙して門を出た途端、ギョツとする。何とツタンカーメンが台上に立っているのだ。ルーブル美術館のエジプト展示室で見覚えの像がどう

してと眼を見張っていると、その前に帽子が置いてあり、笑いが弾ける。近づいて同行者が話しかけると、ものいわぬはずの銅像が、実は金色を施したコスチュームを着た若者であった。小銭の音が帽子の中で小さく鳴ると、銅像が僅かに揺れて「メルシー」といった。

昼食をル・アステイグルアンで摂る。しっかりとした店の構えが続くこのフォーゲン・サントノレの通りは、このお向かいには香水のゲラン社、少し先にはハナエ・モリの店、ピエール・カルダン、イブ・サンローラン等のひしめく一等地域で、ルーブル美術館にも近く、シャンゼリゼの人の流れもそのまま足を運び、パリっ子もよく集まる通りである。

昼食の席に着くやグレイの髪、紳士然のソムリエから、ワインの種々お勧めがある。一九七〇年ものにする。ペンネ・鮪のタタキ・パテ・ミックササラダ等を食す。

デジュネ（昼食）は楽しく過ぎ、ギャルソンは仕事にかける情熱をそのままに、心憎いばかりのもてなしをする。食彩のスパイシーの如し。

続いて中世装飾美術館、ルーブル美術館へ。夜八時からは当地最高のディナーショー「リド」へ行くのだ。

平成十一年五月

# 謎の聖徳太子

柿本 光明

福山市近在の歴史研究会の会報を  
読んでみると、

「日本の歴史に関する古典とされた  
『古事記』や『日本書紀』（二書を併  
せて「記・紀」と呼ぶ）元来、前記  
二書の作成は八世紀の初期で、その  
約百年前に聖徳太子によって『帝  
紀』『旧辞』が作成された。その頃、  
大和朝廷を中心とした諸地域の部族  
王国の統一化が進み、天武天皇の代  
に至るまでにほぼ完成し、いわゆる  
律令制国家体制が着々と整備されて  
いた」とあった。ところが：

中部大教授の大山誠一さん（日本  
古代史）は新著「聖徳太子の誕生」  
（吉川弘文館刊）の中で、伝説だけ  
でなく太子の政治業績を証明する資  
料は一つとしてない、と結論付けて  
いる。前文にも書かれているように  
「聖徳太子」は実在しなかった。  
「事実として確認できるのは、用明  
天皇の王子に厩戸（うまやど）王と  
いう有力な王がいて、六〇一年に飛  
鳥を離れて斑鳩の地に宮をつくり、  
その後、近くに寺を建立（法隆寺の  
前身）したことまで」と厳しく指摘  
している。没年に六二一年（四八才）

と六二二年（四九才）の二説あるの  
も、業績通りの人物としたらおかし  
いとも主張している。結局、八世紀  
はじめの『日本書紀』編纂時に、厩  
戸王に、中国聖徳太子像を託して、  
新たに聖徳太子を作り出したとい  
うのが大山さんの考えだ。

歴史を読み、語る際に、もつとも  
気をつけなくてはならないのは、勝  
者の都合によって、事実の勝者・敗  
者の評価がねじ曲げられるというこ  
とである。

ここで、吉川弘文館発行の「日本  
史年表」から、当時の主な事項を引  
き出してみよう。

- 五三八 仏教伝来（一般五五二）
- 五五〇 百濟より医、易、曆伝来
- 五七三 聖徳太子生れる
- 五八七 蘇我氏、物部氏（守屋）を滅  
ぼす
- 五九二 蘇我馬子、崇峻天皇を謀殺
- 五九三 聖徳太子、摂政となる
- 五九三 難波四天王寺創建
- 五九四 仏教興隆の詔
- 六〇三 冠位十二階を制定
- 六〇四 憲法十七条を制定
- 六〇七 法隆寺創建
- 六二二 聖徳太子、逝去（四九）
- 七二二 古事記（太安麻呂）
- 七二三 風土記援上の詔
- 七二四 播磨風土記成る

七二〇 日本書紀（舎人親王）  
七二三 出雲風土記成る

この年表のなかで聖徳太子となっ  
ているのは、当時は厩戸太子である。  
厩戸太子は、用明天皇と穴穂部間人  
（あなほべのはしひと）皇女を両親  
とし、敏達三年（五七四）に生まれ  
た。いうまでもなくのちに聖徳太子  
とよばれるが、「聖徳」は後代に贈ら  
れた称号である。

そのたしかな初見は、死後八十年  
余りのちの慶雲三年（七〇六）に造  
られた法起寺の塔の露盤（ろばん）  
すなわち九輪のつけ根にある伏鉢を  
のせる方形の台の銘文で、「上宮太子  
聖徳皇」とあるのが起源であろうと  
思われる。

「厩戸」という名の起源については、  
母の間人皇女が皇子を懐妊して宮中  
を巡っていたとき、馬官（うまのつ  
かさ）の厩戸のままで産気づき、出  
産したからだという話が『紀』にのっ  
ている。これは厩戸の名の起りを  
説明するための作り話であろう。

この考え方で推し進めると、推古  
元年（五九三）に厩戸皇子が皇太子  
となり、万機を総摂したという『紀』  
の伝えも疑わしくなる。『紀』が厩戸  
の死後、聖徳太子として尊崇する思  
想が高まった時期に編纂されたため  
に、こうした伝えが記されたのでは

あるまいか。

厩戸が太子の地位につき、政治へ  
の発言権が大きくなるのは、推古の  
即位後数年たって、竹田皇子が死去  
してからだと思像される。しかし竹  
田皇子がいつ死去したかは不明であ  
る。

太子にまつわる話は二種類ある。  
一度に何人もの訴えを聞いて間違え  
ることがなかったとか、四才のとき  
に仏典を読みはじめたという伝説は、  
おそらく誇張であろうが、あまりに  
も有名である。いま一つは推古天皇  
の摂政として、遣隋使を派遣し、憲  
法十七条や冠位十二階を定めたとい  
う点については、太子単独ではなく  
有力豪族の蘇我馬子と協調して政治  
を行ったという説が最近有力となり、  
歴史の教科書でもそのように記述さ  
れることが多くなってきた。

東京都府中市郷土の森博物館の小  
野一之さんは論文で「大阪市太子町  
にある太子墓は、直径約五十メー  
ルの円墳状で、誰が葬られているの  
か、現在の場所には確定したのは十三  
世紀で、太子墓は円墳ではなく八角  
形墳で七世紀半ば以降に現れるのが  
特徴である」と述べている。

これをきっかけに、今後、潤色や  
伝説によらない本当の太子像の歴史  
研究がはじまるのではなからうか。

# 大和探訪

赤松 雅子

六月二十日、平田さんに案内をお願いしてお馴染みのメンバー八人で先ごろ発見された「飛鳥京跡苑池遺構」の現地説明会に行ってきました。伝飛鳥板蓋宮跡で受付をすませ、百メートルほど田んぼの畦道を歩き、テレビ・新聞で見た通りの石造物や積石がある苑池を係の方の説明を聞きながら見学しました。

将来は史跡公園となる予定のようです。飛鳥川の流れとりいれ、蓬萊・方丈などと呼ばれる中島も造り、なぞの石造物とされていた亀石・猿石・酒船石等が配置されて千三百年前の過去と現代の技術が結ばれることを想像するだけで楽しくなります。

このあと古墳めぐりをしたのですが、とくに印象に残ったところのみを書くことにします。

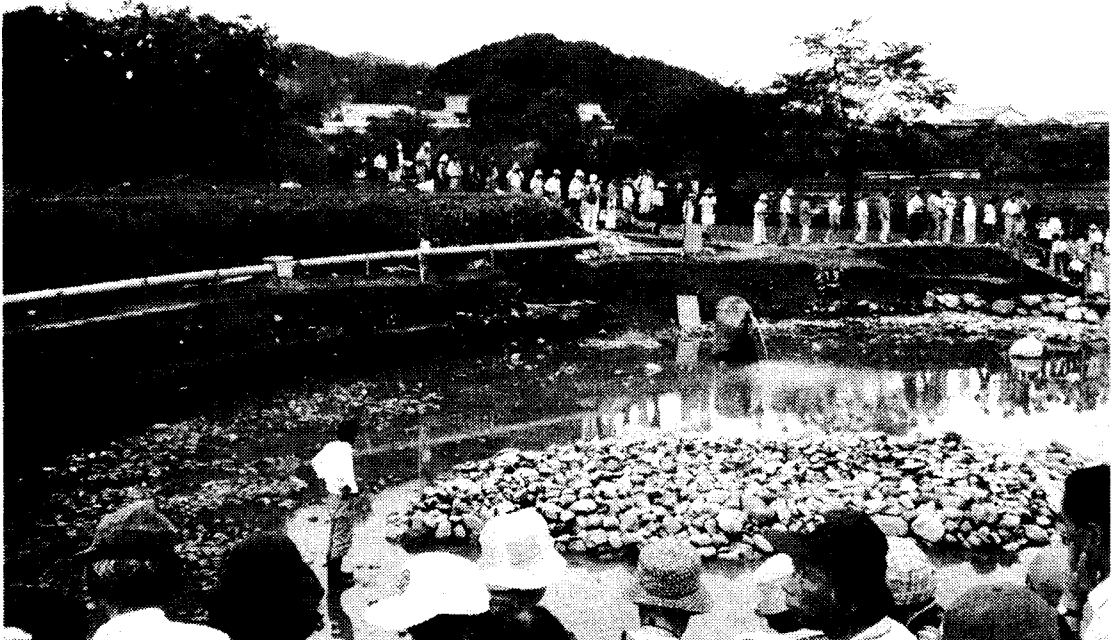
まず最初に、過去何度か飛鳥に来ていながら、なぜか訪れることのないなかつた天武・持統合葬陵（野口王墓）に参拝することになりました。私はなんとなくきれいに整形された八角形の土壇を想像していたのですが、実際には違っていました。前面こそ椀隈大内陵として整備されていま

すが、ぐるりと一巡すると長い年月が経ているためか、墳丘に角はまったく見られず、あまり大きくない普通の円墳にしか見えませんでした。

次は明日香村の山中に入って真弓罐子塚古墳です。広く高い玄室に対して、羨道が南北両方向に延びて開口しているという珍しい古墳です。大きな横長の丸石を四方から縦長のドーム状に積み上げた技術のすばらしさと床面積の広さに一同しばし見とれ、感嘆の声を上げました。

ここからそれほど遠くないところに牽牛子塚という有名な古墳があります。ただ、石室の入口には格子扉がつけられて中へは入れません。中央の間仕切りによって石槨が二つに分けられているのは、合葬を考慮したためでしょうか。床には台部があり、壁は垂直で天井はややドーム状です。四隅がきれいに削られて切石となつているので終末期古墳だと分かります。石室の前には巨大な扉石が外側に斜めに傾いて残っています。横穴式石室なら本来はどの古墳にも閉塞石があつたはずですが、現実にはほとんど残っておらず、これも案外珍しいですね。石室全体が苔むしてとても品格を感じました。

この両古墳の途中の山裾に点々と斜めに穴があるのでありますが、私はこれ



飛鳥京跡苑池遺跡

現地説明会にはとても多くの人に参加しました。水を出しているのが噴水設備、有名な須弥山石とは別なタイプです。

は「横穴墓」と呼ばれているものではないかと思うのですが、どなたか教えてください。

次は巨勢方面に走って御所市の宮山古墳に行きました。室大墓ともいわれています。巨勢山丘陵の丘尾切断による当地方きつての雄大な前方後円墳とのことですが、下部は応神天皇を御祭神とする八幡神社になっていてその横の石段を登っていくので墳丘の全形は全然分かりません。

現在は、後円部の竪穴式石室の天井石のすき間から泥に埋まった巨大な長持形石棺の円形の縄掛け突起の左右が見えるのみです。説明板によると、石室は靴・甲冑等、武器形埴輪列にぐるりと囲まれていたとのこと、生前の被葬者を護衛した親衛隊の武装状態をよく表わしていると思

います。この地方出身の武人といえは、武内宿禰が葛城襲津彦ですよね。その横には一メートル以上ある見事な靱形埴輪の複製が飾ってあります。そろそろお腹が空いてきましたが、

店らしきものは一件もありません。頑張って巨勢寺跡の大きな塔跡を見学したあと水泥南古墳に行きました。石室に近づくくとセンサーが作動して中が明るくなり、この古墳の最大の特徴である蓮華文の刻んである石棺

室内には入れないので、この日は訳があり扉が開けられていて中に入ることができました。

すぐ隣にある水泥北古墳は、中世の豪族の館を思わせるような立派な堀と門構えの西尾家の屋敷内にあります。実は、当日は私たちの他にも見学者があり、また、大阪からも歴史サークルが百人ほどで見学に来るとのこと、両古墳とも西尾さんたちが準備をなさっていたので運良く内部に入って見学できたのです。今

まで私が見た中で一番長い玄室の奥に、目がなれると組み合わせ式石棺がくずれたのが二つ見えました。門の横には出土品の展示室も設けられ、土器等とともに黄金色の耳環が往時の輝きのまま光っていました。

長年先祖の遺産を大事に守り続けてこられた大和の方々は、私たち同好の旅人にもとても優しく冷たい麦茶まで出してくださいました。案内して下さった西尾家の隣家のご主人にも厚く感謝してお別れしました。

檀原市方面に戻ってやつと午後三時に昼食、一同一息つきましました。遅い昼食後に訪れた馬見丘陵公園は、乙女山古墳・池上古墳・別所下古墳などの多くの古墳のほか、菖蒲園・花の広場・結びの広場、睡蓮の池を始めとした多くの池や学習館も

あつてとてもすばらしい公園です。広大な敷地の南端にあるナガラ山古墳は全長一〇五メートルの三段築

成の前方後円墳です。墳丘の東側と頂部は葺石と二列の埴輪でぐるりと囲んで往時を再現し、西側は芝生を張って千六百年前と後の姿を同時に見ることができるようになりました、と案内板にありましたが、どうも予算の関係もあつたのではないでしょう

うか。丘上からは奈良盆地や四方の山並が絶景のパノラマです。最後に、これも史跡公園になつて

なっている広陵町の牧野古墳に行きました。北葛城郡の馬見丘陵全域は粘土山で自然石を採集することができな

いとのことですが、石室の入口の天井石は一度見たら忘れられないほど見応え十分です。中に入るとはできませんが、石室の大きさは県下最大級で、被葬者も敏達天皇の皇子と説明板にありました。今回の探訪では、それぞれ特徴のあるたくさん

### 広島県立歴史博物館企画展 新弥生紀行

— 卑弥呼の知らなかつた日本列島 —  
今年開館十周年を迎えた広島県立歴史博物館の企画展が左記の通り開催されます。

サブテーマに「卑弥呼の知らなかつた日本列島」あるいは「北の森から南の海へ」とあるとおり、今までなじみ深かつた西日本の弥生文化から離れ、新鮮な気分

で日本列島を北から南へ自由に旅してください。展示の詳細については同封のパンフレットをご覧ください。充実した展示内容で、いまから楽しみます。

前売券は今後会の行事で販売しますのでぜひご購入くださるようお願いいたします。なお、八月二十一日の特別講演会の際は、博物館ミュージアムショップで販売しておりますのでこちらでご購入ください。

#### 【開催要項】

- 会場 広島県立歴史博物館 福山市西町二一四—一
- 開催期間 九月十四日(火)～十一月五日(金) 月曜休館
- 開館時間 午前九時～午後五時
- 観覧料前売券 高・大学生 四一〇円 小・中学生 二八〇円

### 第九回郷土史講座

## 神殿の歴史について

神祭り(祭祀)の歴史は少なくとも縄文時代にまで遡ります。しかし、神は祭りの時だけに降臨するものであり、常に人々とともにあるものではないかもしれません。また、神祭りは特別な「場」で行なわれましたが、その場は恒常的なものではありませんでした。

ですから従来、神社建築(神殿)は仏教(建築)の影響を受けて古墳時代の終わり(六・七世紀)ころ成立したと考えられていました。

しかし、近年発掘がすすみ、弥生時代から神殿と思われる巨大建築物が存在したことがわかってきました。たとえば、池上曾根遺跡(大阪府和泉市・泉大津市)や西本十六号遺跡(東広島市)などがそうです。

今回の講座では、こうした新しい発見に基づいてもう一度神殿の起源について考えてみたいと思います。  
(平田記)

### 【実施要項】

- 〔日時〕九月二五日(土)午後二時
- 〔場所〕福山市中央公民館会議室
- 〔会費〕資料代として一〇〇円程度
- 〔講師〕平田恵彦さん

(歴史研副部会長)

## 歴史小説読書会のお知らせ

先日の役員会で種本さんから歴史小説の読書会の実施が提案され、承認されました。まったく新しい試みですが、今後歴史研の行事として原則的には毎月第一土曜日の午後二時に実施していきます。

読書会のねらいは歴史に関心を持ち入会された会員相互の交流の一端となることを目的としたものです。

歴史小説は単なる「歴史的事実」とは異なり、「虚構」を通して「真実」を描くという小説としての面白さが加わります。歴史が好きな方も小説が好きな方もぜひご参加ください。第一回目は以下の日程で行ないます。

### 【実施要項】

- 〔日時〕九月六日(土)午後二時
- 〔場所〕福山市中央公民館会議室
- 〔座長〕種本実さん(参与)
- 〔参加費〕原則として無料

(必要な場合は実費徴収)

課題図書「風流武辺」津本陽著  
朝日新聞社刊 定価一八〇〇円

戦国武将でありながら茶人として後世に名を残した上田宗箇の生涯を描いた歴史小説です。出版されたばかりなのでまだ書店にあると思いますが、ない場合は取り寄せてください。取り寄せにはふつう三、四週間

かかりますので読書会の日までに読めるよう各自準備しておいてください。

★今回は最初ですので準備の都合上、参加ご希望の方は種本さんにお申し込みください。

(種本宅) 〇八四九一五四二二〇  
四七 午後七時〜九時厳守)

## 新入会員紹介

CONFIDENTIAL  
備陽史探訪の会  
個人情報が含まれるため掲載できません。

## 事務局日誌

六月二二日(土)

後援した特別歴史講演会「黒塚古墳と三角縁神獣鏡」は県博講堂が満員の大盛況。参加約二七〇名。

六月一九日(土)

「古事記」を読む。参加二四名。

「陰陽五行思想」の關係について学習。講師は門田幸男さんが担当。

六月一九日(土)

「備後古城記」を読む。参加一五名。  
六月二六日(土)

第六回郷土史講座「四隅突出型墳丘墓の謎に迫る」参加三六名。

講師の安原さんはスライドを用意しての三時間に迫る大熱演でした。

七月六日(火)

役員会。二〇周年行事、記念出版などについて検討。参加一八名。

七月一〇日(土)

「古事記」を読む。参加一六名。  
終了後に行事案内の発送作業。

七月一七日(土)

「備後古城記」を読む。参加一六名。  
七月二四日(土)

第七回郷土史講座「今高野山城主上原氏の滅亡について」参加四四名。講師は小林浩二さん。

★とくに断わりのない場合、会場はすべて中央公民館。

## 『備後古城記』を読む

### 【実施要項】

- 日時 九月一八日(土)午後七時
- ★注意! 八月は特別講演会および慰労会と重なるため休止します。
- 場所 福山市中央公民館会議室
- 座長 出内博都さん(城郭部会長)
- 資料代 実費(一〇〇円程度)

# 歴史研企画九月バス例会 誰も知らないくらしき

くらしきの歴史・文化ゾーンは？と尋ねると、町並保存地区や大原美術館などの答がすぐかえってきます。でもくらしきには、あまり知られていないけれど、他にも素晴らしい史跡や寺社があります。今回の例会はそうした知る秘密のスポットを中心に探訪します。初秋の爽やかな風の中でくらしきを満喫してください。

## 《主な探訪予定地》

### ▼遍照院(倉敷市西阿知)

遍照院(真言宗)は伝承によれば、もともとは式内社足高神社(倉敷市笹沖)の神宮寺だったのがこの地に越してきたという。

境内の瀟洒な三重塔からは「応永二十三(一四一六)年丙申五月十三日 大願主敬白 知海次郎兵衛」の墨書名が発見され、国重文に指定されている。

### ▼宝島寺(倉敷市連島町矢柄)

宝島寺(真言宗)は江戸中期の名僧寂庵が住職を務めた寺として有名だ。寂庵は梵語の研究者として著名で、能書家としても知られる。また、「宝島寺記」「山房雜記」「松石余稿」等多くの著作も残した。

### ▼笹取神社(倉敷市連島町西之浦)

現在は陸続きだが、地名の通りこの周辺は近世までは海岸べりであった。笹取神社はとくに近在の船乗りとの厚い崇敬を集め、古くは「海若宮」と称された。境内は広く、臨海工業団地と化してはいるが、水島の海が一望できる。

### ▼厄神社と薄田泣重詩碑(同右)

厄神社は笹取神社のすぐ東にあり、その境内に薄田泣重詩碑がある。泣重は明治一〇年(一八七七)連島の大江に生まれた。京都や東京で

独学し、第一詩集「暮笛集」を発表、その後「行く春」「しら玉姫」「二十五弦」そして有名な「白羊宮」などの詩集を世に送り、明治中期の新体詩から浪漫主義を發展させた。

### ▼下津井城跡(倉敷市下津井城山)

下津井城は近世初頭に築かれた山城である。城主として宇喜多直家の家臣浮田河内守、小早川秀秋の家臣平岡岩見、岡山藩主池田忠継の家臣池田出羽守長政(城代)と続いた。

長政は赤穂城代から移った築城の名人で、家康の命を受けて現在の下津井城の縄張りを行なったといわれている。

城の規模は東西六〇〇m、南北六〇mで、堀切で東西に二分し、西に本丸・西の丸、東に二の丸を配し、

本丸には天守閣・櫓・門を配置、北側の平地に城主の居館を置いたといわれる。

### ▼総願寺跡宝塔(倉敷市小島下の町)

現在では廃寺となっているが、立派な石造の宝塔が残っている。「建仁三年(一一〇三)二月十日」の銘があり、在銘の宝塔としては岡山県最古、全国でも二番目の古さで、国重文に指定されている。

花崗岩製で高さは二・八m。伏鉢より上部の宝珠までが一石で形成され、その下は低い方形の台石の上に大面取り方柱状の塔身を乗せ、その塔身に龕を作って仏像を浮き彫りにしている。

### ▼藤戸寺と藤戸古戦場

#### (倉敷市藤戸町藤戸)

藤戸寺(真言宗)は行基が開いたと伝える名刹で、本尊は十一面観音である。しかし、戦国の争乱で多くの伽藍は灰燼に帰し、現在の堂宇は岡山藩主の池田氏による再建である。この寺周辺は有名な源平の藤戸合戦の舞台で、当時の模様は「平家物語」に生き生きと伝えられている。

### 《実施要項》

#### 《講師》歴史研(平田恵彦さん)

#### 《日程》九月二十六日(日)

#### 《集合時刻》

午前七時四五分(時間厳守)

#### 《集合場所》福山駅北口

(福山キャッスルホテル前)

#### 《会費》会員 三七〇〇円

一般 四二〇〇円

#### 《受付開始日》

八月一〇日(火)から。事務局に電話でお申し込み下さい。早めのお申し込みをお勧めします。

《その他》弁当・飲物持参のこと。

歩きやすい服装でご参加下さい。

なおキャンセルは前日の九月二十五日(土)までをお願いします。

## 会報九一号の 原稿募集

### 原稿締切 九月一八日(土) 到着分まで(厳守)

原稿は一号につき一人一本に限り、ます(厳守)。本文「一行一六字×二〇行でちょうど一ページです。以下三行毎に一ページの一段になります。四〇〇字詰原稿用紙を使用する場合は、下四字分を空白にして、一行一六字にして書いて下さい。また、必ず楷書で書いてください。崩し字は困ります。

編集時間の関係で掲載できない場合がありますので早めにお送りください。力作を期待しております。今回は予算の都合上一ページ半以内でお願いします(依頼原稿例外)。

# 特別歴史講演会 中世山城の機能と変遷

—戦国の城を読む—

主催 備陽史探訪の会

共催 広島県立歴史博物館

八月は恒例の特別歴史講演会を開催します。講師の千田嘉博先生は城郭研究の最先端をゆく研究者、山城が好きな方で名前を知らない方はいないはず。八月二日は県博講堂を会員で満員にしましょう。

## 【実施要項】

《日程》 八月二一日(土)

《時間》 午後二時開演(四時終了)

《会場》 広島県立歴史博物館講堂

《会費》 無料

《講師》 千田嘉博先生

(国立歴史民俗学博物館考

古研究部助手)

## 【講演内容の概略】

戦国時代の城を遺跡と古文書の両面から読み解きます。報告の目的はふたつあります。まず城の世界的な比較から日本の戦国期城郭の位置を明らかにすることです。それを考える絶好の事例として、毛利氏も好んで使用した山城の斜面防御施設・畝状空堀群をとりあげます。

従来、畝状空堀群は日本の戦国期の山城に特徴的な施設だとされてき

ました。しかしヨーロッパの古代や中世の城でも同じ施設を使っていた。詳しく検討してみると、そこには意外な共通性があることがわかります。それをどう評価するかは、日本の戦国時代の城をとらえ直す重要な手がかりといえます。

つぎに戦国の山城がどのような戦つたかを、まざまざと示す迫力ある古文書を紹介して、遺跡と合わせ籠城の実態を検討します。西日本には同じ形式の文書はあまり見られませんが、関東の北条氏は城の守り方を細かに定め、城兵に周知徹底していました。たとえば籠城のとき見回りはどうしていたか、急用があったら城から出ることができたか、糞尿の処理はどうしたのかなど、きわめてビジュアルに戦う城の姿を知ることができま

こうした北条氏の事例をそのまま広島の中世城郭に当てはめるわけにはいきませんが、当時の様相を復原していく有力な手がかりにはなると思います。これから、わかりそうでなかなかわからない戦国の城の戦う日常を多くの方と一緒に考えることができたなら、と願っています。

戦国の城は多様な側面をもちました。このため見方によっては大きく異なったイメージをわたしたちにはも

ちます。今回の報告は複眼的に城を観察して、戦国時代の雰囲気とともに新しい戦国の城のイメージを提供することができればと思います。

## 【講師略歴】

一九六三年 愛知県生まれ。一九八六年 奈良大学文学部文化財学科卒業、名古屋市教育委員会美術台考古資料館学芸員を経て、一九九〇年より現職。一九九六五年に文部省在外研究員としてドイツ考古学研究所、イギリスヨーク大学に学ぶ。主な著作に「城館調査ハンドブック」新人物往来社(共著)、「城の語る日本史」朝日新聞社(共編著)、「日本の城 世界の城」新人物往来社(編著)、「城と城下町」山川出版(監修)などがある。

(註) 講演内容の概略と講師略歴は千田先生からお送りいただいたものです。

## 『古事記』を読む

### 【実施要項】

日時 九月二一日(土) 午後二時

★注意! 八月はお盆と重なるため休止します。

場所 福山市民会館会議室

★注意! 会場が変更になりました。

座長 平田恵彦さん

資料代 実費(一〇〇円程度)

## 千田先生を囲む会を開催

八月二一日の講演会終了後、講師の千田先生を囲んで慰労会を開催します。講演で感じたこと、疑問に思ったことを先生に直に話したり、尋ねたりできるチャンスです。また、単に冷たいビールが飲みたいという方も大歓迎。慰労会へ参加ご希望の方は事務局までお申し込みください。

《会費》 三〇〇円

《会場》 「養老の滝」福山店

福山市元町一三一五

《日時》 八月二一日(土)

午後五時〜七時

《受付》 八月一〇日(火) ↓

※参加人数が多数になった場合には会場を変更する場合があります。

## 《編集後記》

八月最大の行事は特別歴史講演会です。というより行事はこれだけしかありません。多くの方が参加してくださればいいのですが。

事情があつて今回も磐座亭が編集を担当しました。また平川寿水さんにもお手伝いいただきました。感謝しています。(磐座亭主人)

備陽史探訪の会事務局 ☎七〇〇六六

福山市多治米町五一 一九一八

☎〇八四九(五三)六一五七